

## 熊倉修先生のご退職にあたって

経済学部長 植村利男

熊倉修先生は、一橋大学大学院博士課程を終えられて、(財)電力中央研究所に職をえて、その後1990年に同研究所を退職、同年4月亜細亜大学経済学部教授に就任されました。本年はちょうど21年目にあたり、2011年の3月に定年を迎えられて、長年の教育と研究における顕著な業績が認められて名誉教授になられます。

亜細亜大学経済学部では、専門科目として、「経済発展論」、「アジア経済論」、「アジアの経済制度と日系企業」、および「フランス経済論」等をご担当いただき、先生の研究領域面でのご専門であるエネルギー・電力関係の研究と合わせて、アジアの産業研究とフランスの電力研究をフィールドとして研究に打ち込んでこられました。研究学会としては、公益事業学会で評議員、日本経済政策学会では理事を歴任され、かつこれらの学会において研究発表を重ねてこられました。

経済学部において、コース制が設置された2004年度前後にはとくに、アジア・国際人コースの柱となって、夏休みにはゼミの学生を帯同してタイへ現地調査に出かけられていました。また、その現地調査の成果を報告する形で、全日本学生経済ゼミナール関東大会にて、他大学のゼミとの対抗ゼミによく参加されていました。さらに、経済学部におけるアジア経済との接点を重視された先生は、「アジアの経済制度と日系企業」の科目の中で、日系企業に実際に携わる方々を非常勤講師に迎えて、積極的に学生の目をアジアに向けるよう努力されてきました。

他方で、フランスの電力関係の研究については、1年間の長期研究出張の留学先として、フランスを選ばれて、電力中央研究所時代から関心を持たれていたEUの電力問題、とくにフランスの電力問題を中心に研究に専念されて帰国されました。それ以降の『亜細亜大学経済学紀要』に執筆された論文はほとんどがフランスの電力問題にかかわる研究でありました。それらの研究は、2009年12月には、『フランスの経済発展と公企業—フランス電力公社の成長と構造変化—』(芦書房刊)にまとめられて、先生の研究の社会への貢献として大きく取り上げられています。とくに、先生の所属する公益事業学会において「2009年度学会賞」を受賞されました。学会賞審査の講評には「今日、経済分析は予測を行うために理論的ベースになり、かつ政策提言の背景になっている。この分野においても叙述的な研究に加えて、よりトータルなシステムを対象とする、制度の理論・実証分析が、インテンシブに進んでいくことを評者は望んでいる。このような観点から、今後は、現実志向的な経済理論を設定した上で実証経済学的手法と比較経済史的手法を統合したアプローチによる経済発展過程の分析が、極めて有用であると思われる。以上の点から、審査委員会は本書が学会賞にふさわしい著作であると判断する。」(『公益事業研究』第62巻第2号、2010年、74頁)と記されており、長年の先生の研究のアプローチの重要性和成果の重要性が指摘されています。なお、亜細亜大学としても、教育・研究面において優れた社会的貢献をなされた方を顕彰する「五島

賞」を授与することが決まりました。併せて、慶祝いたしたいと存じます。

これまでの20年間のうちには経済学部に関連して、二度にわたり学部長の任にあたられました。1回目は1995年からであり、2回目は2003年からであり、いずれも、経済学部において大きな課題が生じた時であり、先生の調整により乗り越えることができましたことは、先生の人柄と人望によるものと確信いたすとともに、深く感謝いたしております。

また、2008年4月より大学全体の教務委員長として、教育改革に取り組まれてきました。さらに、同年9月よりは副学長として大学改革に一層のご努力を傾注、教育改革の方向性の提示とその推進にある程度の道筋を作られて、2010年4月には教務委員長を退任、同じく9月には副学長を退任、ご退職になられる年まで全力で教育改革に傾注されてこられましたことに対して心より感謝申し上げる次第です。

先生のご研究は、アジア経済の急速な発展の時とEU経済の発展の時とちょうど時期を合わせて進められてきました。いま、アジア経済とEU経済はアメリカにおけるリーマン・ショック後に引き起こされた世界的大不況の克服に挑んでいますが、残された課題も多く、先生のご研究からの慧眼による政策的示唆が大変に有益な時機になっていると推察されます。経済学部に対するこれまでのご教導に心から感謝申し上げますとともに、ご健勝を心からご祈念申し上げます。